

問 題 報徳社に関する記述のうち、〔a〕から〔c〕に当てはまる最も適切な語句の組み合わせはどれか。解答群の①～⑤のなかから一つ選びなさい。

報徳社は、1800年代初頭に〔a〕が中心となって設立がすすめられた五常講（農村における相互救済組織）であり、その後小田原を出発点として各地に広まっていったものである。そこでは、組合員からの出資金や〔b〕を基礎としながら、組合員から貯金を預かり、それらを原資に資金の貸し付けや〔c〕などの事業、さらには善行者の表彰事業などを行っていた。

<解答群>

- | | | | |
|---|---------|--------|--------------|
| ① | a. 二宮尊徳 | b. 寄付金 | c. 土木・水利・開墾 |
| ② | a. 二宮尊徳 | b. 所有地 | c. 土木・水利・開墾 |
| ③ | a. 大原幽学 | b. 寄付金 | c. 共済・販売・購買 |
| ④ | a. 二宮尊徳 | b. 寄付金 | c. 共済・販売・購買 |
| ⑤ | a. 大原幽学 | b. 所有地 | c. 耕地整理・交換分合 |

(24年度・全国統一上級・JA経営管理・農業協同組合論)

- 1 **解 答** ①（難易度：難）
- 2 **解 説** 日本の協同組合思想の形
- 3 成をだれの思想に、またどのような形
- 4 態の運動に求めるかについては、なお
- 5 議論は定まっていない。日本の集落に
- 6 は中世以来、頼母子講やゆい講などが
- 7 あり、近代的な協同組織とされる産業
- 8 組合でも、それらを産組の下部組織と
- 9 して運用する事例が少なくなかった。
- 10 これらの講は主として農民および一般
- 11 庶民による自然発生的な組織としての
- 12 性格をもち、特別の思想や理念に基づ
- 13 くものではなかった。
- 14 そのなかで、ひとつの思想体系をも
- 15 ち、かつ幕末の商品・貨幣経済の一般
- 16 的発達のなかで、農民の生活困窮を克
- 17 服する相互扶助運動を指導した大原幽
- 18 学（先祖株組合）と二宮尊徳（報徳社）

19 の思想と実践は、わが国協同思想の出
20 発期における代表的なものといえるだ
21 ろう。

22 尊徳の思想には大きな柱が3つある。
23 第1は“道徳と経済の調和”であり、
24 これは「道徳なき経済は罪悪であり、
25 経済なき道徳は夢想である」の一節が
26 有名である。第2は“自然循環と社会
27 循環の調和”であり、これも尊徳独特
28 の天道・人道論としてよく知られる。
29 第3は“協同の思想”であり、これは
30 勤労・分度・推譲の実践による社会奉
31 仕・積善のユートピア建設と、それを
32 実現する手段としての至誠実行がよく
33 知られている。

34 尊徳の「報徳」思想の今日性ないし
35 近代性については、次の3つが指摘さ
36 れている。第1は人間中心主義、第2
37 は科学的合理主義、第3は主体性の尊
38 重である。

39 城山三郎『豪商と篤農』は、尊徳の
40 ことを「彼は農民を超えた農民であり、
41 また、個を超えた組織の人であって、
42 体制や常識からはみ出した人である」
43 と評している。

44 尊徳は道徳の充実向上を望んでいた
45 が、これを人びとに説く時には「人は
46 こうすべきであるから、こうしなさい」
47 とは言わなかった。「こうすればお前さ
48 ん自身にも世の中にもこういう得があ
49 るからこうしなさい」という言い方を
50 した。

51 こうした言い方・考え方は今日的な

52 発想であり、かつ現実的な発想といっ
53 てよい。圧制や飢饉にあえぐ農民たち
54 に道徳の観念論を持ち出しても受け入
55 れられるはずはなく、極貧のなかから
56 はい上がった自らの体験から出た発想
57 だったからこそ、農民たちの心に響い
58 たのである。

59 尊徳は夢中になって読書をした。彼
60 にとって読書は生きがいであり、人生
61 そのものであった。彼の勉学の目的は
62 現実を乗り越え、ありきたりの百姓か
63 ら抜け出るためのものであった。

64 16歳で一家が離散し、伯父の家に預
65 けられた尊徳だが、そこで彼がなした
66 ことは独立への強い決意とそれを可能
67 にする実学・実践の積み重ねであった。

68 その一つに、小田原にある仙了川の
69 堤沿いでナタネ栽培を行ったという話
70 が残っている。また、用水路の両側の
71 自分の家の荒れた土地、まだ開墾を終
72 わっていないところで稲の捨て苗を拾
73 って栽培し、1俵の粃をとったという
74 話もある。この2つによって尊徳は小
75 を積んで大をなすという“積小致大”
76 の原理を発見したのである。

77 また、年貢が4公6民とか7公3民
78 の重税にあえいでいた時代に、正式に
79 耕地になっていないところ、つまり原
80 野や荒地を開墾して耕作をすれば、
81 “鋤下年季”といって、7年ないし10
82 年無税になることを知った尊徳はこの
83 制度を徹底的に活用した。

84 18歳で伯父の家を出て独立家計を

85 もった尊徳は、“積小致大”の原理と“鋤
86 下年季”の制度を利用して、24歳で
87 1.5ヘクタール、35歳で4.1ヘクター
88 ルの土地を所有する地主にまで成長し
89 た。こうして念願の一家再興を成し遂
90 げたのであった。 いしだまさあき
(石田正昭)

91

92

93 122行×17字

94 $(15+1) \times 2 = 32$ 行

95 122 行 -32 行 $=90$ 行

96